

乙 貞

おと

さだ

第154号 通巻27巻 第3号
2007年9月15日 発行

守山市立埋蔵文化財センター
Tel. Fax 077-585-4397

〒524-0212
守山市服部町2250番地

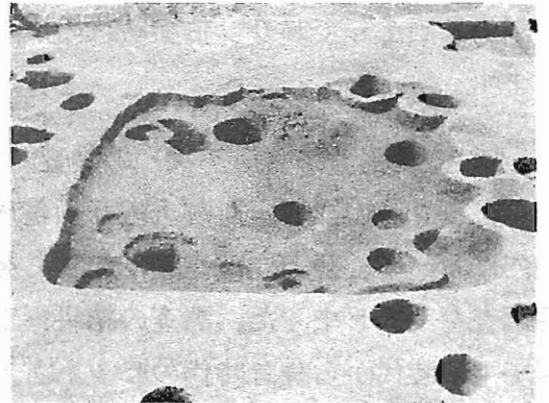
はじめに

日本最高気温の記録を74年ぶりに更新したという暑い夏も終わり。気がつけば、いつの間にか、秋の虫の声が聞こえてきました。市内各所で進められている発掘調査の近況を、お届けいたします。

☆ 発掘調査だより ☆

1 欲賀南遺跡の調査 (調査中)

区画整理工事、宅地造成工事に伴う欲賀南遺跡の発掘調査では、奈良時代から鎌倉時代にかけての遺構が検出されています。奈良時代の遺構には竪穴住居や土坑(大きな穴)、建物の柱穴群などが見つかっており、境川を見下ろす高台に集落が広がっていることがわかりました。奈良時代の遺物は多量の土器の他、屋根瓦が少量出土しています。瓦は当時、宮殿や役所、寺院などに使用されたもので、欲賀南遺跡の周辺に寺院や小規模な役所があった可能性も考えられます。欲賀町は古代寺院「欲賀寺」の伝承が残る興味深い土地です。伝承では境川まで寺域が広がっており、調査地点も寺域に含まれます。今後は、その存在も含め、関連性を考えていく必要があるでしょう。(小島)



▲竪穴住居:一辺3.4mの方形住居で、屋根を支える主柱穴は4つある。北側中央壁際にカマドとみられる焼け土のかたまりが確認された。



▲出土した屋根瓦(平瓦)

2 赤目遺跡(第7次)の調査 (調査終了)

守山駅の西約500m(勝部二丁目字北十三)で集合住宅建築工事に伴う発掘調査を実施しました。その結果、耕作土下で古墳時代後期から奈良時代にかけての土師器、須恵器を含んだ層が確認されました。この層の厚さは50cm近くありました。こうした状況や近接する調査の成果から、当調査区は旧河道にあたるのが推測されます。(大岡)

まぼろしの「欲賀寺」について

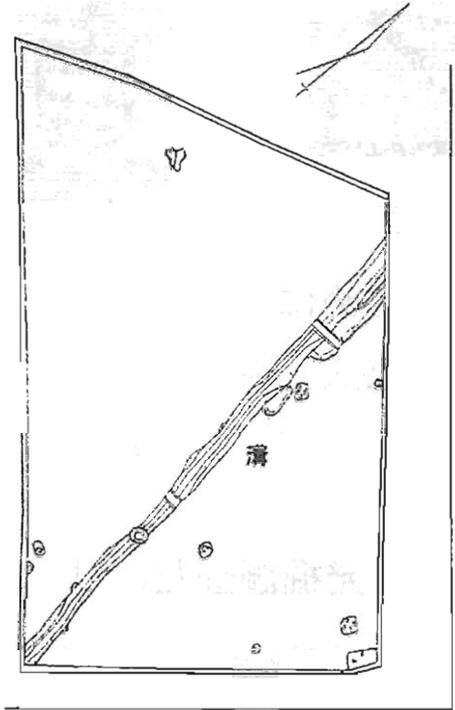
欲賀町の浄光寺(真宗本願寺派)には、天正十二年(1584年)に模写したと伝えられる『都賀山病療院欲賀寺四至疆界之絵図』が所蔵されています。

それには、南に結園川(境川)が流れ、金堂(薬師仏)、講堂(釈迦仏)、宝庫、学問所、公文所、安之国造墳、そして都賀山などが広範囲に描かれています。

また、天正十三年に豊臣秀吉が記した文書にも「欲賀寺道場云々」とあり、大安寺の鵜田が広がっていたことがうかがえます。「欲賀寺」については、考古学的に、その所在や寺域などは実証されていませんが、今回の調査で手掛かりが得られる可能性があります。

3 金森東遺跡（第48次）の調査（終了）

金森町土地区画整理地内において、共同住宅建築に先立ち発掘調査を実施しました。調査の結果、溝とピットを検出しました。溝は、金森町土地区画整理調査で検出した溝の続き（乙貞121号T-5参照）で南北方向に直線的に延びていることを確認しました。周辺の調査でも同じ方向の溝や東西方向の溝が複数確認されており注目されます。溝からは土師器片が少量出土しており、古墳時代の溝の可能性あります。（森山）



▲ 金森東遺跡 48次調査平面図 0 5m

4 欲賀南遺跡（第7次）の調査（終了）

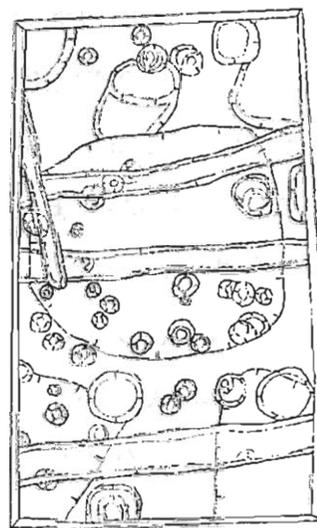
現在調査中の欲賀南遺跡土地区画整理地内において、個人住宅建築に先立ち発掘調査を実施しました。調査の結果、上層で平安時代から鎌倉時代のピットと土坑と溝が、下層では古墳時代前期から中期にかけての竪穴住居を確認しました。

下層のSH-1は規模が5m以下の竪穴住居の可能性のある遺構で、長さ約6cmの緑色凝灰岩の剥片が出土しました。中央の窪みから古墳時代前期の高坏が出土しています。

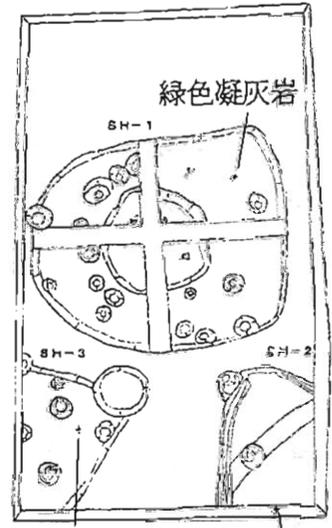
SH-2の竪穴住居では周壁溝が残っていました。上層から約4cmの滑石の剥片が出土しています。遺物は少量ですが、古墳時代中期頃と考えられます。

SH-3からは上層から結晶片岩が出土しています。時期は、床上から高坏が出土しており、古墳時代前期から中期頃と思われます。現在調査中の欲賀南遺跡では各時代の遺構や遺物が検出されていますが、今回の調査では古墳時代前期から中期頃に玉作りが行われた可能性が考えられ、周辺の調査状況も合わせて検討していく必要があります。

（森山）



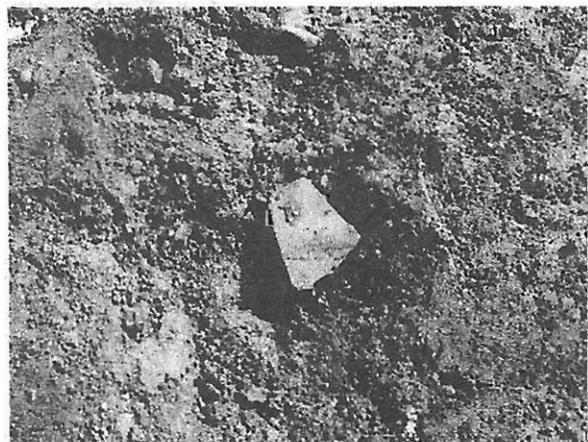
▲ 上層平面図



▲ 下層平面図



▲ 欲賀南遺跡 調査平面図



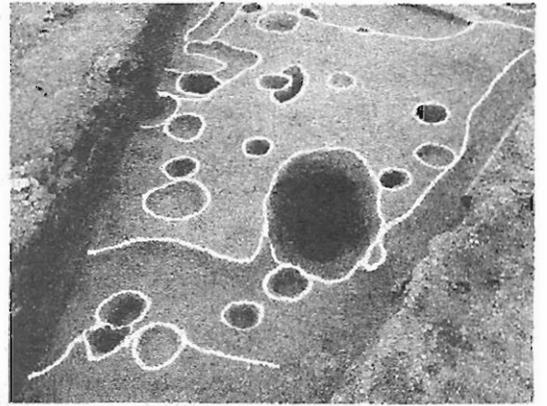
▲ SH-1出土の緑色凝灰岩

5 古高遺跡（23次）の調査（調査終了）

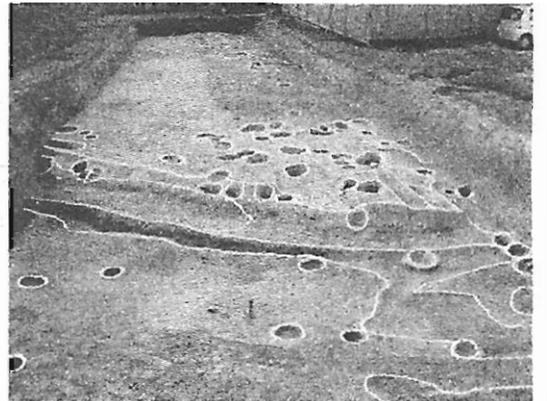
大門町地先（字高樋）において、宅地造成工事に先立って発掘調査を実施しました。調査の対象地はT-1とT-2の2箇所に分けられます。T-1（今回の調査区の東端の調査区）では、時期の異なる2棟の掘立柱建物跡と土坑2基を検出しました。そのうち土坑2からは土師器や黒色土器、白磁などが大量に出土し、鎌倉時代に埋められたものと考えられます。

T-2からは、東西方向に掘られた溝や柱穴、土坑が検出されました。検出された土坑3からは、土師器や須恵器などが出土し、その形状から6世紀代の遺構と推定されます。今回の調査地は、昭和59年に実施した古高遺跡発掘調査（1985年『守山市文化財調査報告書第16冊』、1986年『同 第20冊』）に近接した場所です。検出された柱穴は、昭和59年に検出された建物跡と同時期（鎌倉時代）の土器が出土しており、関連する建物の一部と考えられます。

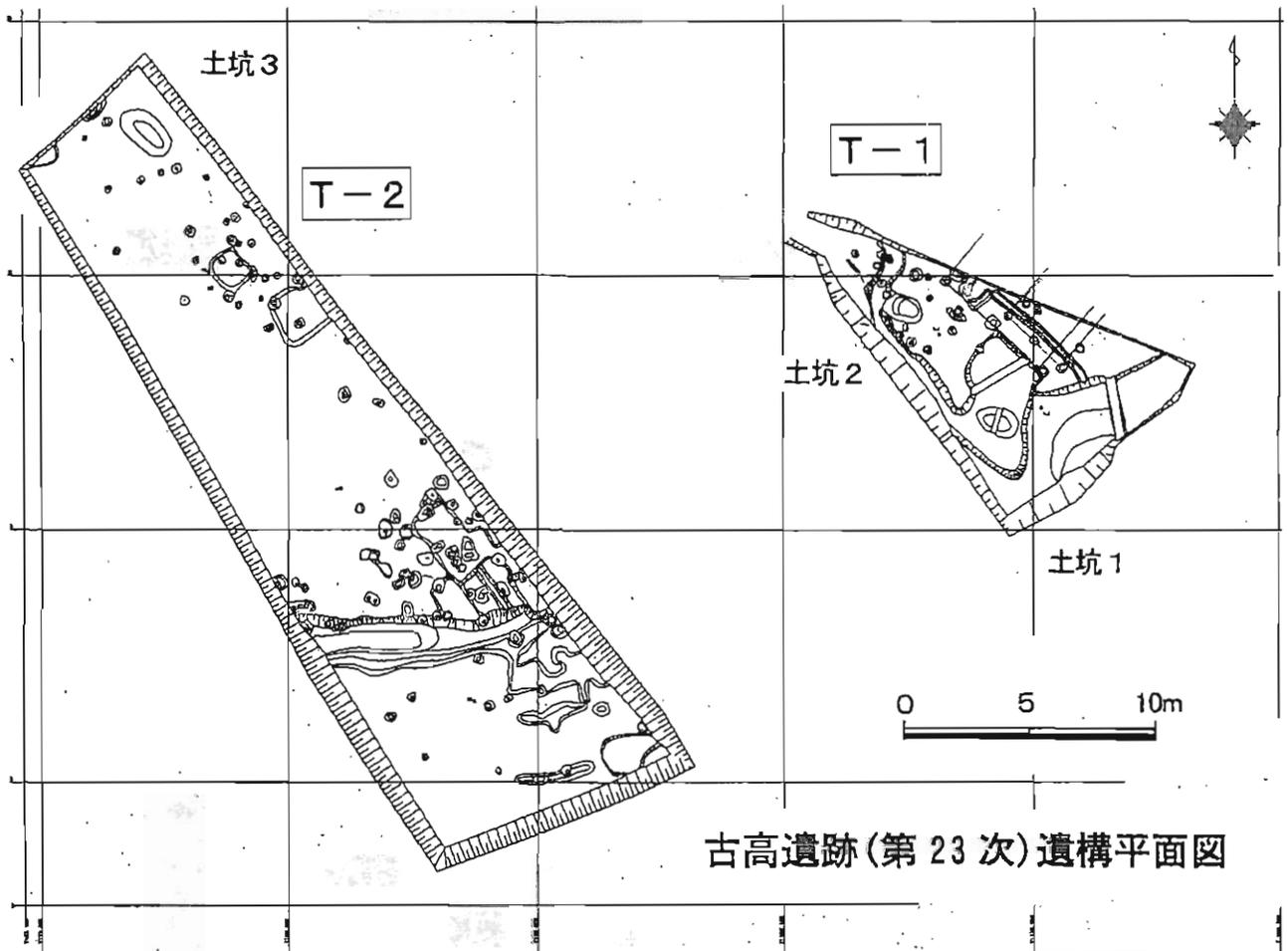
（畑本）



▲ T-1調査区 土坑2



▲ T-2調査区 全景



6 下之郷遺跡 (62次) の調査 (調査中)

下之郷遺跡では、昨年に引き続き史跡整備に先立つ発掘調査を実施しています。昨年度は、遺跡の東側で5条の環濠や掘立柱建物跡、方形周溝墓の可能性のある遺構などが検出されていました。

今年の調査では、昨年度、確認出来ていなかった一番内側の環濠(内環濠)や内から2番目の環濠(SD-2)の埋没状況、各遺構の時期確認、それから方形周溝墓の可能性のある遺構(SX-1)の年代把握や周辺の環濠との比較(同時存在かどうか)などを進めていく予定です。SX-1の一部で、断ち割り調査を実施したところ、弥生時代中期後葉(Ⅳ期後葉)の壺の破片などが出土しました。また土層の堆積状況を観察した結果、SX-1は方形周溝墓の墳丘部が削平され、周溝部分だけが残存したものと考えられます。(川畑)

埋蔵文化財発掘調査の種類

市内で実施している発掘調査には、目的に応じていくつかの種類や方法があります。「試掘調査」は、部分的に試し掘りを行い埋蔵文化財の有無を確認します。「確認調査」は、埋蔵文化財包蔵地の範囲・性格・内容等の概要までを把握するための部分発掘。「発掘調査」は、総掘り、全部掘削を行い遺構の全容を明らかにします。それ以外にも、分布調査、立会い調査、慎重工事対処などがあります。場所や遺構の種類、そして現状変更される内容(建築や造成など)によっても調査の種類に違いがあります。

現在、進めている下之郷遺跡の調査は、史跡整備を行なう前に実施する、地下遺構の状況や整備の方法を検討するためのものです。

☆ 文化財の窓 ☆

下之郷遺跡の赤米栽培

市内のあちこちの田んぼでは、農家の方々が忙しそうに稲刈りをはじめています。

今では、機械化、自動化も進み1枚の広い田んぼでも、見る見るうちに収穫は終わってしまいます。農業も本当に便利になりました。

さて、下之郷遺跡では、吉身小学校の5年生約100人と下之郷じいちゃんズと文化財保護課の協同で赤米や「熱帯ジャポニカ」という稲の品種を約300㎡の学習田で栽培しています。遺跡のうえでの稲作体験は昔ながらの田植、稲刈りを「じいちゃんズ」の手取り、足取りによる指導で行なっています。植えられている赤米は日本に伝承された3品種で9月中頃から後半に出穂・開花となり、見ごろです。じいちゃんズと子供たちのあたたかいふれあいの光景は、きっと弥生集落でも見られたことでしょう。(編集子)

